

僕の留学考

学生記者

片桐将吾 (法学部3年)



最近、留学について考える機会があった。中央大学では、留学に対する諸制度はかなり整っていると聞く。さて、そうなる後は、私自身の留学に対する意志の問題なのであるが、これがまた、なかなか難しい。

具体的に言うと、留学において、行動と準備の間で目下、悩み中なのである。鶏が先か卵が先かについては、哲学の訓練を受けていないので何も言えないが、留学においては、さて、どうすればよいのだろうか。

先人の教え

2017年4月6日付けの朝日新聞23面で、みずほフィナンシャルグループの佐藤康博社長がこのように語っていた。

「(前略)グローバル企業のリーダーたちと対話をしてきた。強く感じたのは、歴史観、哲学、胆力、先を読む力のほか、個人が魅力的でないと相手にされず、トップ同士で関係を築くこともできないと

いうことだ」

なるほど。どうも、準備すべきことは思いのほか、多いようだ。当然、語学力は言わずもがな、といったところだろう。その語学については、作家の佐藤優氏がこのようなことを書いていた。

「あまり早く留学してはダメだと考えています。(中略)少なくとも最低限の語学力を身につけてから海外へ出ないと、単なる物見遊山で終わってしまいます」(同氏著『悪魔の勉強術』)

ほら、やはり、私には留学は遠そうだ。勉強すべきことが山積しているから、ここはじっくり勉強しようかと思っていたら、しかし、国際投資アナリストであるムーギー・キム氏の著作において、このような記述を見つけてしまった。

「この逸話は『勉強ばかりして逃げていないで、勝負のために行動に出よ』という教訓として、私が心にとめている物語だ。教養に関しては常に幅広く視野を拡大して世界観を広げるのが望ましい。し

かし、自分が『これで食べていく』という職業に関しては、考えてばかりではなく、実行に移すエクセキューションで勝負しなければならないのだ」(同氏著『最強の働き方』)

うーん、どうしたものか。ふと、この言葉が頭に浮かんだ。

「『つまり、ぼくが知らないでいた方がいいことは教えてもらえないということですね』と私は言った。/『なぜならば、あたしにわざわざ教えてもらわなくとも、ほんとのところ諸君はそれを既に知っておるからだ』/私は黙っていた。/『あるいは諸君はその絵を描くことによって、諸君が既によく承知しておることを、これから主体的に形体化しようとしておるのだ』(村上春樹氏著『騎士団長殺し 第1部 頭れるアイデア編』)

そうか。実は、私の中では結論は出ているのか。しかし、まだ形体化はできていないようだ。私も、この文を書くことで正しいものを見つけ出せるといいのだが。